117 誌上発表

『鍼法秘伝鈔』について

山﨑　陽子
日本鍼灸研究会

『鍼法秘伝鈔』は日本江戸中期の貞享2年（1685）に刊行された和文の鍼灸書である．内題は無く，書名は目録題による．題僉には「（意斎／扁鵲）針法秘伝鈔（打針／経針）全」とある．書高15.5cmの小本で，序1葉，目録7葉（序と目録は通し丁番号），本文25葉，全て33葉からなる．撰者不明の序文によれば，意斎の嫡男で，武州（埼玉）在住の盲人鍼医・意三の術を，門人が集撰したもので，「龍珠世宝」と題したという．

伝記資料によれば，御薗意斎の嫡子は常正（1582～1669）で，二代目を襲名したが，眼を患っていたとされるから，この常正が意三ということになる．ただし，序文に述べる通り，本書の内容が全て意三の伝とするには，若干の疑問がある．それは本書の奥書に「扁鵲が経鍼と意三流とを合わせ解く者なり．腹の穴は意斎流，余穴は扁鵲が経鍼と心得う可し」とあること，本書と江戸初期に成立した鍼灸書『扁鵲新流鍼書』とを比べると，若干の異同はあるものの，類似する点が多いからである．ちなみに『扁鵲新流鍼書』は，その識語によれば，「奥列九部住人越斎寿閑」あるいは「従大唐渡実管云者」の著作とされるものである．

本書の伝本はほとんど見ることができない．貞享2年版は北里研究所東洋医学総合研究所の修琴堂大塚文庫に一本が所蔵されている（し-422-01）．九州大学附属図書館医学分館所蔵の写本『龍珠世宝』（請求番号リ・32）は，刊本の写本と見られるが，外題は「龍珠世宝　全」となっており，刊本との間にごく僅かな異同がある．昭和13年（1938）には柳谷素霊の序と頭注を付して皇漢医書写伝会から油印で刊行されている．題僉は「針法秘伝抄　全」とあるが，前記の序文は収録されていない．日本赤羽会医報発行所から出た「日本赤羽会医報」に横組みタイプ印刷で三回にわたって清水完治の訳注が連載されている．ただし，序文ならびに刊本の本文20葉以降の「針立処之図」が省略されている．この連載は1960年代のものとみられるが，正確な時期は未詳である．

本書は全96章からなる．6章までは天地陰陽四季について，7章から41章までは施鍼上における基本や注意を述べている．42章から94章までは病證別に主治穴と鍼法を述べている．95章は気付け鍼に触れ，96章は鍼穴とその主治を，6枚の穴図（仰人図3図，伏人図1図，側人図1図，腹部の図1図）を付して解説している．図は経脈図ではなく三人図的である．診察では陰陽，虚実，表裏，寒熱，左右，昼夜，蔵府，病の新旧などを，脈診では浮沈遅数を，また治療においては補瀉，深浅，抜鍼後の処置などを重視する．主治穴は概ね穴名と部位名を混用する．鍼法では手技には言及するが，打鍼については一言も触れられていない．

江戸初期頃までに成立した古い流派の鍼灸書が，江戸前期後半から江戸中期にかけて刊行された例は，珍しいものでは無い．たとえば本書と前後して刊行されたものに，匹地流の『大明琢周鍼法一軸』『大明琢周鍼法抄』や無分流の『鍼道秘訣集』がある．江戸後期においても，石坂宗哲が雲海士流の『神倶集』を発掘し，『新撰広狭神倶集』と題して刊行している．このような鍼灸諸書は，江戸期前半の鍼灸の主流であった元明鍼灸とは異質の，中世鍼灸の様相を色濃く残存させたものであった．江戸中期後半以降，元明鍼灸の影響が次第に薄れてきたあとも，これらの鍼灸書やそれを形成した流派自体が復権することはなかったが，こうした鍼灸書に見られる鍼灸の傾向（経絡の否定，，腹部の重視，100穴前後の鍼穴の使用など）はしばしば顕在化し，これもまた中世までの鍼灸の主要な傾向である灸法の隆盛とあいまって，江戸後期の鍼灸を多彩なものとしたのである．